

中高生の英語学習に関する 実態調査2014 —学習実態と英語力の関係性—

工藤洋路 (玉川大学)

加藤由美子 (ベネッセ教育総合研究所)

福本優美子 (ベネッセ教育総合研究所)

ykudo@lit.tamagawa.ac.jp

調査の背景

大規模調査

- 2008年「中学校英語に関する基本調査（教員調査）」
- 2009年「中学校英語に関する基本調査（生徒調査）」

ヒアリング調査

- 2013年「中高生に対する聞き取り調査」
- 上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム2013

大規模調査

- 2014年 本調査

ヒアリング調査

- 本シンポジウム 第4部「教員聞き取り調査」

本発表の焦点

授業でたくさん書いている

たくさん英語を聞くことは大事

将来英語を使いたい

英語で映画はあまり見ない

予習は単語の意味調べ

洋楽よく聞く

英語の能力によって、学習実態、学習への意識、英語への意識などは異なるか？

調査の概要

- 「中高生の英語学習に関する実態調査2014」
- ベネッセ教育総合研究所
- 調査企画・分析メンバー
 - 根岸 雅史 (東京外国語大学)
 - 酒井 英樹 (信州大学)
 - 高木 亜希子 (青山学院大学)
 - 重松 靖 (国分寺市立第二中学校)
 - 工藤 洋路 (玉川大学)
 - 木村 治生 (ベネッセ教育総合研究所)
 - 加藤 由美子 (ベネッセ教育総合研究所)
 - 福本 優美子 (ベネッセ教育総合研究所)

調査の概要

- 調査テーマ
 - 中高生の英語学習の実態と意識に関する調査
- 調査方法
 - 郵送法による自記式質問紙調査
- 調査時期
 - 2014年3月
- 回答者
 - 中学1年生～高校3年生 6,294名
 - 中学1年 (1,057名) , 2年 (1,028名) , 3年 (996名)
 - 高校1年 (931名) , 2年 (790名) , 3年 (1,433名)
 - 不明 59名

調査内容

- 中学校入学前の英語学習について（幼少期の英語体験・学び、小学校英語・小学校時の学校外学習の役立ち感）
- 現在の英語学習について（授業の理解度、授業における活動内容、先生の授業での英語使用、勉強時間、学校外学習、習い事、学校の授業の予習・復習）
- 英語学習に対する意識について（英語の好き・嫌い、つまずき、英語の学習観）
- 英語に関する意識や関わりについて（外国や英語との関わり、自主的に英語に触れる活動、英語の必要性、将来の英語使用に関する意識）

Can-do形式による質問

- Can-do形式による英語力の自己評価
- GTEC for STUDENTS can-do statementsの「教室外」can-doを使用
- 中学生にはGRADE 1～3、高校生にはGRADE 1～5の各GRADEの4技能からそれぞれ1つの記述文を選択

回答の選択肢は以下の4つの通り

「経験したことがある・できる」

「経験したことがある・できない」

「経験したことがない・やればできると思う」

「経験したことがない・やってもできないと思う」

分析の方法

「英語力」 ⇔ 「学習実態」 「学習への意識」

何で測るか？

「自己評価のためのCan-do形式の質問紙」の回答結果



「学習実態および学習の意識などについての質問紙」の個別の項目ごとの回答結果

※学年ごとに照合

調査対象者

学年	中学 1年	中学 2年	中学 3年	高校 1年	高校 2年	高校 3年
人数	1,010 名	982 名	956 名	908 名	765 名	1,392 名

- 両質問紙に不備なく回答している中学1年生から高校3年生の6,013名を対象とした。
- 郵送法による自記式質問紙調査のため、特定の学校から多くの参加者を得ていない。

Can-do自己評価による英語力

- 各技能、中学生は最初の3つの項目のみ調査、高校生は5つの項目すべてを調査
- ①と③を選んだ項目のうち、再難度の項目で述べられている能力をその学習者の能力と判断
 - ① 経験したことがある・できる
 - ② 経験したことがある・できない
 - ③ 経験したことがない・やればできると思う
 - ④ 経験したことがない・やってもできないと思う

例) 合計 8 点 (その学習者の能力を表す得点)

Reading			Listening			Writing			Speaking		
R1	R2	R3	L1	L2	L3	W1	W2	W3	S1	S2	S3
①	③	④	③	③	②	③	③	①	③	④	②
2			+	2			+	3 + 1			

Can-do自己評価による英語力

学年	上位群 人数	下位群 人数	合計 人数	境界 得点
中学1年生	570	440	1010	10/11
中学2年生	456	526	982	11/12
中学3年生	435	521	956	11/12
高校1年生	425	483	908	15/16
高校2年生	398	367	765	14/15
高校3年生	680	712	1392	15/16

- 各学年、人数が半数ずつに最も近くなる得点で、上位群と下位群の境界線を引いた。
- 境界得点が高得点となっていることから、項目の難易度が低かった可能性がある。
- 英語力に学年間の差があまりないことから、学年間の比較は好ましくないと見える。

結果のまとめ①

(1) 英語力の差により差異が見られた項目

- 授業中に自分の気持ちや考えを英語で「書く」「話す」という活動を行っている
- 将来、自分が英語を使うイメージを持っている
- 英語の歌を聴いたり歌ったり、英語音声の映画やテレビ番組を見たりしている
- 予習や復習として、「和訳」を行っている
- 予習や復習として、「問題を解く」ことをしている

結果のまとめ②

(2) 英語力の差により差異が見られなかった項目

- 先生が授業で英語を使っている
- 英語の勉強で大切なことは「英語でたくさん会話をすること」という意識
- 英語の勉強で大切なことは「単語をたくさん覚えること」という意識
- 英語の勉強で大切なことは「文法の知識を増やすこと」という意識

考察①

- 自己評価により英語力が高いと回答している生徒は、そうでない生徒より、学校の英語の授業において、自分の気持ちや考えを英語で「書く」「話す」という活動を行っている割合が高いことから、授業中に発信型の言語活動を実施することの意義は高いと思われる。
- 授業外で、英語の歌を聴いたり、映画を見たり、SNSでメッセージを英語で送ったりするなど、生活の中で実際に英語を使用することも、英語力の向上につながると考えられる。

考察②

- 実際の英語使用ではないが、予習や復習で、和訳や問題演習を行うことも、英語力が高いと判断された生徒が多く行う学習行動として挙げられている。これは、英語力が高い生徒は、学校の授業の予習や復習を重要視しており、授業に関連すると判断した学習についても勤勉に取り組んでいることが予想され、結果として、様々な学習方法を持ち合わせていることが推測できる。これらのことから、英語力を向上させるためには、授業内外で実際に英語を使いながら、多様な学習方法を実践することであると示唆される。

今後の課題

- 英語で書いたり話したりする活動や実際に英語を使うという行動は、英語力が高いから実行可能であるとも考えられる。同じような活動や行動を英語力が高くない生徒が実践した場合、その生徒たちの英語力が向上するかどうかという因果関係の検証は、今後の研究の課題である。
- 英語力をCan-do形式による自己評価で行ったことの信頼性を検証することも今後の課題である。
- 本研究では、個別の項目ごとに英語力との関係性を検証したが、いくつかの項目を組み合わせるなど、より全体的な傾向を把握することも今後の課題である。